

外国語教育
めまぐるしく変動する政府による英語教育推進の課題を明らかにする

犬上達也

討議の柱

- (1) 外国語教育の現状と課題―生徒の学力の実態・外国語の現状
- と今後をとらえ、実践と研究をあきらかにする
- (2) 外国語教育の内容と方法

―はじめに―分科会の概要と特色

外国語教育分科会は二日間全体で三本のレポート、参加者は司会者、共同研究者、運営委員、レポート発表者を含め、一日目一六名（内大学生八名）、二日目七名（内大学生二名）であった。レポートのタイトルと発表者名（所属）は次の通り。

英語を通じて平和を学ぶ大学でのささやかな実践

鈴木史朗（釧路公立大学非常勤講師）
またまた英会話

菅野信一（厚沢部町立鶉中学校）

小学校外国語活動の実践と課題
犬上達也（南富良野町立南富良野中学校）

今年度の分科会は一般参加者からのレポートがなく、共同研究者、司会者によるレポートのみでやや淋しかった面があることは否めないが、特に学生を中心とした参加者からの質問や討論参加で中身の濃いものとなった。

また、二日目の参加者が大変少なかったことは残念であるが、より活発で幅広い考え方、討論を行うためにも今後より多くの参加を期待したい。

二 レポートと討論の内容

1 犬上（上川・南富良野中学校）が発表した「小学校外国語活動の実践と課題」は、外国語活動に関わる巡回指導員として小学校へ出向き、学級担任に対し児童が興味関心を持つ外国語（英語）指導の方法と、助言したことから見えてきた課題について報告を行った。学生の参加が多かったことで、このレポートについては二日間にわたって討議された。

(1) 小学校外国語活動に何を求めるか
① 授業の基本的な進め方として、

① 授業の基本的な進め方として、
② 授業において使用される言語は活動の説明を含め ALL ENGLISH
③ 進めることを原則とするが、その場合長い英文は避け、単語、もしくは短い表現に努める必要がある。英語だけで理解

が困難と思われる場合、絵を用いたり教師のデモンストラーションで補うことが効果的であると報告された。また、*what* (何) については「?」、*time* (時) という英語については時計図を用いる、*get up* (起きる) については「起きる」といことばではなく、「起床する絵」を用いるなど、そうすることによって、日本語を介さずに英語を英語として、聞こえた英語から指示内容を理解することが可能であるとの論議がなされた。

高等学校で *All English* で授業を行った場合に、生徒の状況によっては英語を拒絶してしまう例もあるとの事例が紹介された。

② 英語嫌いにさせないための工夫を授業の随所で行うことの重要性について論議された。簡単なことであっても、できた喜び、ほめられる喜びは大きいため、英語に対する学習意欲を高めることにつながるとの論議がなされた。

客

(2) 楽しいと感じさせるため方法の駆使はどうあるべきか

① 小規模校で授業を行う場合、児童数が少ないが故にできることがある。例えば英語劇の発表の際には、他学年児童を観る英語学習への憧憬を感じさせるとともに、近い将来自分が「あんなふうに英語を使いたい」と感じさせることが可能である。

② 英語の歌を単に歌わせるだけでなく、リズム変化やゲム性を持たせることで楽しさや面白さを感じさせることができる。

(3) Activity 中心の外国語指導と文法指導、表現指導との兼ね合いはどうか

① 会話や activity を通した活動から英語表現の基本的な約束事や語順、表現の適切さ等について気づかせることは、初学者にとっては困難がある。また、近年の英語教育がコミュニケーション能力を伸ばすことを重視していると言われるが、表現を多用した場合、指導内容が希薄なものになってしまう恐れはないだろうかという論議がなされた。外国語として語を学習する場合、会話表現の指導および練習に重点をおいた展開では深みのない学習になってしまう傾向が予想されることが指摘された。同時に英文法を学習することは英語学のすべてではないが、文法に触れずに学習することは乱暴ではないかとの論議がなされた。ただ、文法の指導と会話表現の対極にあるものではなく、同時並行で指導すべきであるとした。

② 塾で会うバイトをしている学生参加者が塾指導で見られる状況に触れ、中学生が He / She is の表現については動詞の

使用の方も含め理解されているようだが、*This/That is*の表現については理解されていないことが多いとの報告をした。教科書に頻繁に登場する表現については定着しやすいが、そうではない表現の定着には課題があることが明らかになった。

③従来の英語教育では指導内容の殆どがインプットに力点が置かれていたが、これから必要になってくるのはインプットと同様にアウトプットを増やしていくことである。インプットを繰り返し指導、練習していくことで表現力をつけていくことにつながると思われる。そのため例えば、A L Tとの授業に於いて今年度は英語を聞き取ることに重点をおいた取り組みを行っているとの報告もあった。合わせて、校内に *English Room* を新設することで、英語学習に対して興味関心を高めると共に、アウトプットに向けた素地を養うことができるのである。

またイングリッシュ・キャンプやイングリッシュ・ナイト、ハロウィンパーティーなどへの参加の呼びかけを通して、教室内のとどまっている自己表現活動を外部に発信していく可能性を持っている。

④(4) 指導の前段にあるものについて
① 学生参加者から小学校での学級崩壊を見てきた経験が報告

された。報道や書物で情報を得ているとはいえ、実際に小学校に出向き、現場を見てきた経験と現在でも荒れているという状況は教師を目指す学生たちにとって大きな不安を抱かせていることが明らかになった。安心して教育実習を体験できるように小学校、中学校での生活指導に関わる問題解決が急務であると言える。

(5) 小学校外国語活動における評価と「教科化」された場合の懸念について

① 文部科学省の小学校学習指導要領では小学校外国語活動の目標について次のように述べている。

「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」

また、評価の関係については、「外国語活動の評価については、設置者において、学習指導要領の目標及び具体的な活動等に沿って評価の観点を設定することとし、文章の記述による評価を行う。」とある。

あくまでも外国語（英語）に慣れ親しませることが活動のねらいであることから、「評価不要」、もしくは「文章表記」が望

ましいとの声が大勢を占めた。

② 教科化された場合には、当然評価評定を伴うことになるが、
ア 現場の小学校教員の声としては以下のようなものがある。
イ 規準や基準に基づく正しい評定を出すことができるか
ウ 評定に関わる仕事量が大きく増えること
エ 指導者として外国語によるコミュニケーションを高める必要
性
座 現在、小学校教員を対象とした「外国語活動」の研修会、講
座は各地域、各支庁で開設されてはいるが、全員が参加出来
る状況にはなっていない。基本的にすべての教科、科目を担任
が指導するといふ小学校の現状、学校教育、学級指導、教科
指導に対して保護者、地域社会からの要求を考えると、評価
評定を伴う新たな教科の実施は、小学校教員にとって多大な
負担を強いることになるのは明らかである。
活動また、中学校英語の土台として機能している現状の外国語
内容にどういう変化が出てくるのかということについては不明
な点が多く、今後の文科省の動向を注視していく必要がある。

2 菅野（檜山・鶉中学校）が発表した「またまた英会話」は、授業開始時のウォーミングアップとしての英会話を相づちや相手に対する聞き返しを含めた練習を毎時間行うことで、授業で指導したことを使える段階にまで持つて行くための実践が発表された。教科書には会話練習のためのいい教材が見あたらぬことから、如何に「言わせるため」の流れをつくるかが討議された。

一年生であれば Do you have ... を用いた対話文は二学期九月頃から実践し、学年を追うごとに使用表現を増やし、三年生であれば現在完了なども用いた指導も行っていること、他の参加者からも話す訓練を行うことで即座に反応できることが生じていくこと、繰り返し返し英語で発話する練習をすることが生徒にとつて、より高いコミュニケーション能力をつけていくことにつながると論議された。

3 鈴木（釧路公立大学）が発表した「英語を通じて平和を学ぶ」は、大学でのささやかな実践は、大学教育のあり方と現在おこなわれている状況、問題点について討議がなされた。大学は本来研究機関であるが、卒業後のことを考慮した場合、職業を得るための機関でもあることを踏まえて授業を行い、学生を指導している実態が報告された。そして研究機関と

しての役割は大学院に、大学が市民として必要な知識を身につける場が変わってきていると同時に、教育大学でさえ学生の目的が多様化してきている実状が明らかになった。

三 今後に向けて

冒頭に記したように今回の研究集会では、現職教職員の参加が少なく、英語教育、外国語教育を目指す学生が多かったことで、三本という少ないレポート数にも関わらず、活発な論議が行われたことは意義深いものがあった。

特に教員を指す学生の皆さんから、大学での学習、研究殆どで実地経験が少ない状況でも、授業場面を意識した具体的な質問や意見が寄せられたことは、近年の学生の変化によるものといえるだろう。

討議の中心は小学校外国語活動の実施に関わる諸問題、コミュニケーション能力を高めるために中学校でどのような実践が可能か、近年見られる大学英語教育の変化などであった。

今後、予想される小学校での外国語活動の教科化に伴い、中学校、高等学校の指導内容、指導方法の変化が予想される。その結果、現場の教職員やこれからの次代を担う教職員、地方教育委員会には更なる負担が強いられることが懸念される。現場の教職員や英語教育を学ぶ学生、保護者が今後提示され

研 文 科 省 の 動 き に 関 心 を 持 ち 、 問 題 点 を 感 じ る と と も に 、 教
集 会 に 数 多 く 参 加 さ れ る こ と を 期 待 し た い 。

送 信 先

kokyoso@dokokyoso.jp

発 信 元

doglowdenpapa@gmail.com